會報

會岳山本日　130　昭和19年3,4月

山登りの體力

濱野正男

「山に於ける强さのことなど」と云ふ關根氏の十二月の會報の一章を讀んで、日本人の體力、特に山での體力と云ふことに關聯して、ヒマラヤ遠征隊の編成に就いて若干私の考を記るします。

體力と云ふものを或る程度年齢を基準として推しはかることは出來ますが、あながち、若い年齢の人達が、或るスポーツの種目、水泳だとか、陸上競技だとか、野球だとかで非常にいゝ記錄を出したからと云つて、必ず若い、何歳位までが一番强いと斷定すべきことではないものだと思ひます。特に、人間の體力と云ふものを、廣い意味で――一生の間の期間――見た時には、未だ二十歳にも滿たない者には强さはあつても、それを、丸のみに信じてはいけないものだと思つてゐます。競技で强いと云ふことゝ、山で强いと云ふことは一緒の樣ではあるが、そこには若干の異つたものがあるのだと考へます。

水泳にしろ、陸上競技にしろ、その他各種の運動競技に於ては、非常に運動神經が鋭敏であり、その上體力、體格が並以上の若い者――年齢で云ふならば十六、七歳――であつたならば、猛烈な練習と頭のいゝ指導者（即ちその選手の缺點を矯正し、正規の型と、無理の無い自然のまゝの選手獨得の特徴を生かしたコーチをする者）と選手の研究心の旺盛とにより、技術は急速度に進歩し、或る時には中學生にして、一流の選手と肩を並べ得る樣になります。

この若い一流の選手は、一體何年間その全盛時を保てるでせうか、彼等の獲得した榮冠は、或る意味に於て全く體力の强さと云ふことではなしに、たゆまざる努力の賜であつて彼等の樣な體格と、生れ付いての特技を持つ者であつたならば、努力と指導良ろしきを得れば、或は同じ位の成績を揚げ得られるものだと信じます。それを、唯若さと云ふ一言で片付けるべき問題ではないと思ひます。永泳競技に於ての若い年齢者の著るしい進出は、その人達を培つた指導者の努力によるものであります。

又一方、この若い中に一流になつた人達の其の後の成績を見ますと、殆んどと云つて良い位成功した者はありません。即ち選手生活の長い人は非常に少ないのであります。

これは、その人の精神、其の後の努力の不足により、或は慢心したり、不節生したり、この樣なことが原因しては居りますがしかし、それ以上に多い事は十七、八歳から二十二、三歳の間に病を得る者の多い事であります。よく、あんな體の男が、肺病だ、肋膜だ、なんて考へられないと云はれる事が間々あります。これは、若い時、發育盛りの十七、八歳――二十二、三歳の間に、あまりの苛烈な猛練習により、體力の破壞によるものであります。まだ完全に成熟し切ては居ないこれらの人達の肉體は、いたわりながらの技術の向上をしなかつたならば、强いもの――鋼（ハガネ）の樣な體力――が一時にポキンと折れる樣に其の後の使用不能に陷入ります。

それ故に眞の意味の日本人の競技に適した年齢と云ふものは、各種の競技の記錄によるものではないものだと言へるわけです。

私も所謂若い頃、中學の時から大學の豫科の始めまでは、或る種の競技の選手の生活を續けてきました。自慢めいた事ではありますが、中學の四年の時に全國大會で優勝し、將來性ある若い者と云はれ、又其の後に於ても、未完成ながら未來のNo1だなんて云はれた事もありました。しかし、リーグ戰の試合生活は、若い十代の者には非常に過激であつて、休みなしに次から次への試合の連續を續けてゆきます中に、體力と技術と鬪志は、次々にしば〳〵分離する樣になります。先づ體力が弱つて來ます。私の考ではありますが、この時に體を、いたわり、更に次年への希望を抱いて、練習を續けたならば立派な選手になれると思ふのであります。この時に全く無理をして勝利の爲に過勞に陷入れる樣なことが起つたならば、その者の選手としての生命は、なくな

目次

○山登りの體力……濱野正男―一
○餅……織内信彦　四
○ヒマラヤ登山小史（二）……田邊主計　五
○冬の蓐科池の平……茨木猪之吉　七
○萬年雪と氷河のほとり……藤島敏男　八
○切拔帳……九
山岳、地誌、民俗等に關する新刊書目拔萃
○會員通信……一〇
跡部昌三・長屋敏郎・中村一
○會員消息……一一

ります。

本當の意味の充實した完成された選手と云ふものは、其の試練を經て尙一層の努力と、練磨を重ねて得た技術、體力、鬪志を持つた者を云ひます。本當に完成された體力と云ふものは、二十四、五から三十までの成熟し切つた時が一番强いものだと言へるわけです。

これは軍隊生活の兵の生命と、體力その他を合せた强さを考へる時も言へます。

眞の精鋭な部隊は、所謂二年兵、三年兵を根幹とした、四年、五年と云ふ古い兵も含めた、結束した部隊であります。

これは軍隊生活の眞髓を把握したもの、肉體的にも、完成に近いまでに軍隊的に訓練されたもの、精神的にも眞の軍人精神を把握し實踐にうつし得るものであります。

又、案外に强いと云はれるものゝ中で、滿期除隊から間もなく召集をうけたと云ふ豫備役兵であります。

これらは何故に强いかと云ふと、長い間の訓練と、練磨により、肉體的にも、精神的にも完成しきつた域に到達したと云ふ一言につきると思ひます。從つてその年齢も二十四、五歲から三十前後と云へます。彼らのは猪突的な勇敢さではなく、瞬間的な强さではなく、あくまでも執拗に、忍耐强く最後まで希望を捨てずに戰鬪を續行すると云ふ樣な强さであります。そこには、もろさは少しもなく、たくましい强さで、所謂、强靱と云ふ文字で表すことが出來ます。

さて、山登りする者の强さに移ります。山に入る時期、即ち生れて始めて山登りをする時の年齢を考へますと、人により異つては居りますが、家庭の事情により、山に入るを許可されるのは、比較的おそいのであります。

中學生時代に山生活の片鱗にふれる者は、その中で最も早期の部に屬します。一般には中學生の終り頃、年齢で云ひますと、十七、八歲頃であります。

おそい部に入りますと二十歲を越してから山生活に入る者もあります。從つて、眞の意味の山での技術、經驗が、華の咲く時は、二十二、三歲からであります。

登山術と云ふものは、他の競技の如く、競技場での練習により向上出來るものではない。

山に入り、實際に現地に即して登攀をして始めて爲し得るものであります。登山術の書は、その時は唯參考になるべきものであり、本を讀んだゝけでは、どうにもなりません。

從つて、四季とり〴〵の山の生活を續けなければ、あらゆる山での經驗を自由自在に生かし、我がものとし、「自分の登山」と云ふものを完成させる事は出來ません。他から指導されたゞけで、自己の研究もなく唯の模倣である登山は、眞の登山ではありません。自分で計畫し、自分でそれを實行するに至る迄に到達しなければなりません。それが、次第に高級となり、山の峻險さ、高さを望み、果ては、最高のもの、未知のものを渴望し、ヒマラヤへと飛躍してゆきます。

山での訓練は、よい指導者により急速に進步致します。しかし、山を步いてゐる中に、所謂「唯一人の山」と云ふ單獨登山の味を、覺へます。自己の考、自己の夢、自己の希望、これが自然と共に生活してゐるとよりたのしいものと感じ、常に獨りの山登りをたのしむ樣にもなります。從つて山登りする者は或る程度の、排他的な傾向又は性質を、見出すことがあります。

所謂、變人的なタイプの者が多くある樣に思はれます。

故加藤文太郎氏も最後の頃の山では、自分の相手となり得る樣な優秀な「山登り」をさがし求め、その者と一緒により高い、より困難な、山。大きな山に挑まんとしたと云ふことであります。登山者は、その練磨時に於ては、馬車馬的に、眞一文字に山に突入し、ありとあらゆる困難を求め、それに打ち勝たゝ、勝を得やうと、努力する樣であります。

然し、それが、或る年數を經過致しますと前述の如く、一つの結束した隊を要求する樣になります。唯一人では大きな山は登られないのであります。この精神的の發展は「登山」と云ふものに對する、精神的の飛躍であると同時に、人間そのものゝ大きな、進步であつて、團體生活に耐へ得る廣い氣持を、自分の心中に持つ樣になつた事であります。

即ち、鍛へた山での生き方、進み方は、その時に始めて完成されたのであります。

長期間の山の籠城生活にも坦々として耐へる「ねばり」と、鍛練一點張りの時の如き、烈々とした鬪爭心をも、靜かな心の中に、併せ治めて懼ける樣になる時であります。

より高い山、例へばヒマラヤの如き大きな對稱を考へて山の計畫をたてる時には、この域にまで到達した人格の既に「角」の取れかけた人、を選ぶべきであります。角が取れて圓くなると、自然と飛躍と云ふ文字を置き忘れて、回想と回顧を夢に見る樣になり勝ちでありますが、本當の山登りする者は、更に若い夢を見つゞけ、前進しなければなりません。

ですから本當の大きな山に挑戰せんとする者は、夢を見る者——云ひかへれば若い靑年でなければなりません。

かくの如きにまで練磨した時は既に前に述べた如く、二十四、五歲から三十歲前後と云へます。人によつては、三十以後でもこの境地を保持し得るものであります。

然し、肉體的に考へますと、我が國の軍隊の生活同樣なことが云へます。

山での强さと云ふものが、唯單に、腕力的なものではなく、肉體と精神の渾然たる一致が始めて表はす力を云ひます。從つて天性的に山に適した者もありますが、一般には、より多く山に入つて、より困難な登攀の生活を續けた者があらゆる今までの經驗を生かして行動した時に表はす力であります。一見山で强いと稱される者は、筋肉質の、ほつそりした者、身長は兎に角均衡の取れた身體付きであります。

山で强いと云ふのは、强靱にして、ねばり强く又、最後の突擊的登攀に於ても旺盛な攻擊力を示す者を云ひます。

ねばりは相當の年齢に達しても

保持出來ますが、この最後の攻撃力は若さを持たねばなりません。從つて、相反した樣な兩面を、併せ持つと云ふのは相當の修練を重ねゝばなりません。

一番强い者。二十四歳から三十五歳位まで、私はこんなことを考へてゐます。

種々な性質を持つた者。突擊的人物、大小式人物。あらゆるものが遠征隊々員には必要となつて來ます。唯、强い、肉體的に强い者ばかり集めて、合宿練習しても大きな山は登り得ません。

山が遠く、高く、長期にわたればわたる程人の和と云ふものが要求されます。その時にこそ、最後の力を示す人が必要となります。

最後の力を示す人は、多くの經驗を自己のものとした、角の取れかけた人、云ひ換へれば、何時、何處に拋り出されても、びくともしないで立ち上がれる人達であります。

この樣な、山での勝れた人達になるには、並大抵の苦業ではないので、あだかも武者修業者の、何年も〳〵の間、山に籠り、木の根を枕に、草の實を喰べ、自然を相手とし、武技を磨き膽を練り、天晴れ達人の域に到達し得るのと、比較しますと甚だ似たところを見出します。

從つて山での生活は、遊びではなくなります、常に眞劍であります。山登りの技術を練り、山の懷に入り、自然の中に溶け合した生き方、その人の山を愛し、山登りを好むことだけの理由から發した場合に於てさへ、自ら意識して得るのでなくして、自然の中に知らず〳〵の中に、或る何物かを自分のものとする樣になります。武士はこれを達人の域と云ひ、或は人は禪の奧義だと云ひます。

近代的の登山に於て、禪だの、悟りだの、と云ふと、一笑される人もあります、がそれを求める爲の山登りに非ずして、無意識の中に心の中に强く、確信を持てる何物かを得ると思ひます。どんな事があつても、あわてないで何事にも善處しうる判斷力と、信念であります。

戰の眞唯中に「山に登れ」と云ふと國家的な觀念不足だと一言に云ふ人もあります。

自然に惠まれ、山紫水明の日本と云ふ有難い國に生れ、それらの環境の中に培はれて來た我々が、自然の中に溶け合つて、始めて知る、日本の國の美しさ、古幾多の英雄、傑物を育んで來た山や川、永遠に變らぬ自然!! 祖國と云ひ、故國と云ふ、有難さは、知らず知らずの中に、山を愛する事が、自然を愛する事になり、ひいては國土を愛する如く强く變つて來ます。

學徒が出陣しました。學窓に於て既に彼等に强靱な體力があつたかどうか、不撓不屈の强烈な攻擊精神が出來てゐたかどうか、一般的には幾分の懸念もありますが、併し少く共山岳學徒にはこの問題は心配無用だと信じます。

彼等の修練場に於けるそのまゝを戰場に表したならば、苦しみに耐へ忍び、熾烈な爭鬪心を日兵として充分に發揮し、併せて軍人精神を把握した曉に於ては、一番强い兵となり得るは必定と思ひます。

山での生活の不自然——何日も食はずに居る事もあり、又寢る事もない事もあり、日中歩く事もあり、三日も四日も歩かずに留まる事もあり、甚だ、不自然な、不自由な生活だ——毎日の生活が、苛烈な前線の毎日に、如何に、豪膽に、如何に、安心して先の見通しを付けるか、私は彼等の悠々迫らざる行動を信じてゐます。

山で强い者、鍛へたものは必ず、强い兵となり强い愛國の至情を、眞心を、興國の隆替を賭した今の時に、振ひたゝせて、立派に任務を遂行してくれるものと信じます。

昨年の初秋に、久し振りで軍服を脱ぎました。未だ戰塵の臭みも身に付いてゐて、頭の中を整理する事も、覺つかぬ始末です。

戰場の事どもを想ふと、私の最後の戰場が、今彼我の血戰の地域となつてゐるソロモン方面なので、心配です。頭の整理が出來ますれば印度の遠征當時の記錄をたよりに殘つた報告の、裝備、食糧、其の他の事などを片付け、再び御召しにあづかる時までに完成して置きたいと思つてゐます。

この一文は混亂した頭の中の、渇まきの樣なもので獨り良がりの事が多いと思ひますが、こんな考へを持つてゐる奴が居ると思ひ讀んで下されば幸です。

（一九、一、二五）

會員總會通知

（一一頁御覽を乞ふ）

山岳第三十七年 第二號內容

目下印刷中の「山岳第三十七年第一號」の內容は左の通りであります。

山に省る……木暮理太郎
冬季ベテガリ岳登山史……北大山岳班
飯豐山の澤について……二高山岳部
山兎の生態學的觀察……梅棹忠夫
北葛澤再記……西岡一雄
春期後立山の行動……關西大學山岳班
雪の大日岳登攀記……越後山岳會
……新潟高校山岳部
カシナギ深層谷……塚本繁松
人力車上の觀山旅行……小島烏水
ムスターゲアータ……吉澤一郎
矢澤米三郎君の想ひ出を語る……小島烏水

以上約二百七十頁程のものでありますが一日も早く刊行の上お届けすべく努めて居ります（編輯部）

餅

織内信彦

携帶食糧としての餅の價値に就ては既に實際家の冬山等に於る幾多の經驗によつて定評があるが、多くの場合天幕のなかでラディウスなどを用ひ調理する上でその偉効を發揮してゐるやうである。米の炊飯をするとなれば相當量の水と燃料とある程度大きな鍋類が必要であるのに反して、餅ならばごく備な水と小さな鍋（三人位ひなら中型コッヘル）があれば尤に數人の主食を調理し得るばかりでなく、溫食美味であることはもとより、單時間で軟くなるから次から次へ煮ながら熱いものを喰べることの出來る有利な點があげられる。

最惡の場合にはちよつとした火で燒くこともよい。砂糖の豐富な頃は砂糖餅として數日間ある程度の軟か味を保たせることも出來て早期の冬山登山者には愛用されたものであつた。

冬山の露營などで餅を炊くのにどの位ひの時間を要するか、曾て私が調べたのを參考迄に記すと次のやうである。餘計な數字まで並べてあるやうだがこれは附帶條件だからそれとの關聯のもとに御覽願ひたい。

高度	2,300m
外氣溫	−8°C
天幕内氣溫	+3°C
氣壓	562m.m.Hg
Boiling Point	91°C
800c.c の水に雪が溶ける時間	20分(1°Cの水)
上記の水が Boil する時間	15分 91°C)
餅が軟く伸びる迄の時間	10分
乾燥野菜類が煮〜る時間	20分

右は正月に八ケ岳の山稜で幕營した折ラディウスを使用した場合にとつたラフなデータの一例であつて、煩雜になるから省略するがその後雪洞などで小型コッヘルを用ひ殆ど同樣の條件下で三人分の餅の炊事を行つたこともある。少量の醬油と乾燥肉の類を投ずれば直に即席の雜煮が出來上り副食物などをつくる手間も省けるし、狹い雪洞のなかでふうふう吹きながら熱い雜煮餅を啜ふのもまた時にとっての一興であらう。

然しかふした話は何れも天幕なり雪洞なり一應落着いて炊事の出來る環境を得て始めて役に立つのであつて、登攀最中小閑を利用して晝食をとるといふやうな場合には少々無理なことであるのは言ふまでもあるまい。從てほんとうの携帶糧食とは言へないのかも知れない。

砂糖餅のやうにして若しも相當長期間軟性を保たせられるなら火はむ論のこと、水も炊事具も不要になり、それこそ携帶糧食として完璧なものになるわけである。ところが從來の砂糖餅やアミラーゼ等を加へて製つた軟餅の類はせいぜい週餘の時間しかその目的が達せられてゐない。試驗の結果はグリセリンを三〇%加へた餅でもまず二週間で固化してしまふやうである。

「糧食研究」といふ雜誌の第二〇九號（昭和十八年十二月）に東大農藝化學教室の住木、鈴木兩氏が「長期間柔軟なる餅の製造法」といふわれわれには耳寄りな研究を發表してゐる。

誰にでも出來る簡單な方法で約一五〇日以上の軟性保持に成功してゐるし大いに參考になると思はれるので以下その摘要を紹介することにする。本文を草する目的もそれを紹介するのにあつたので、貧弱な私の經驗などを述べたのは實は蛇に描いた脚のやうなものであるに過ぎないのである。

兩氏は研究の基礎實驗として昔から柔軟劑と謂はれてゐるグリセリン、糖及糖アルコールなどの無効に近いことをまず確めた上、吸濕含濕物質の添加を試み更にグルタミン酸ヂソーダ、リンゴ酸ソーダ、乳酸ソーダ等のナトリウム鹽類に及び、粉末味噌、粉末醬油に至るまでおよそ百種類に達する化學的添加物又はその配合品を餅に加へて半ケ年の長期間放置したり或はまた冷藏庫に入れたりして、かなり綿密なその有効添加物探索の網を張つてゐる。

結論をいふと、はりめぐらされた網にひつかゝつた獲物は次のやうなものであつた。それは食味上も一向支障なく期間中發黴もしなかつたさうである。

添加物實名	配合%	固化迄の日數	備考 水分42%
1. 對照	2		
2. 醬油酸	6	150	水分34% 尚柔軟
2. アミノ酸醬油	35		
3. 乳酸ソーダ	12	150	水分34%で柔軟にして−5°Cにて30時間凍結せず
3. 砂糖	16		
4. 乳酸ソーダ	12	150	同上
4. 粉末醬油	16		
5. 乳酸ソーダ	12	150	同上
5. 粉末味噌	16		

餅と水分と添加物の關係は兩氏の報告から計算してみると添加物以外の餅粉に對して直に10%減の水分が加へられてゐるやうである。從て全體の量に對し添加物23%の場合餅粉は38%であり、水分は34%といふことになる。

右表の他にもこれと同等の効果をあらはしてゐるものが少くなかつたが配合量が三〇%を超へてゐるので、それでは餅獨特のらしさを著しく變へはしないかと思はれたから轉載するのを控へた。面白いのは第三の乳酸ソーダ一二%砂糖一六%が一五〇日以上柔軟でゐるのに對して乳酸ソーダ一〇%砂糖二〇%の配合にするとわづか十日間しか効力がないことである。

ほんの二%の差異が決定的にものを言つてゐるところなど餅といへども侮り難いデリカシイを有つてゐる事が知れて苦笑させられた。

新カットは上田徹雄氏作

實際やつてみる場合にはこの邊に細心の注意を要するのであらう。

乳酸ソーダ等のアルカリ鹽類は大變有効であるが單獨に使用すると何れも不快なアルカリ味が殘るので實用的でない。研究者は粉末味噌を前表第五のやうに配するのが食味上も榮養の點でも最も好ましいと述べてゐる。

冬山の携帶糧食として絶好だと考へられたので以上簡單に引用紹介した次第であるが、今日となつてはその主體となるべき餅をすら製ることが容易ならぬ狀態であり、お互に上下貧富の區別なく二合三勺の配給の他にはこれを得る途を有つてゐないやうな有樣であるから、この事も或は一場の夢物語に了つてしまふかも知れないのである。(二月一日)

振替貯金の送金に就てお願ひ

御承知のやうに昨年十一月振替貯金規則が改正になりまして、料金は總て加入者の負擔となりました。

つきましては振替貯金で御送金の場合は料金**十錢**をお忘れなく御加算願ひ度存じます。

但し會費の御送金に限りその必要はございません(會計)

ヒマラヤ登山小史(二)

田邊主計

最近ヒマラヤへはヒマラヤン・クラブの會員、殊に東部セクションの會員によるシツキムへの數々の探檢が行はれた。

一九三五年西部カラコオラムのピイク36(二五・四〇〇呎)(二四、七五〇呎——吉澤氏高度表)への探險はジェイ・ウオーラア、ジェイ・ハント、ジェイ・エス・カアスロオ及ダブリユ・アル・ブロザフツトにより行はれた。吹雪に惱されつゝ二四、五〇〇呎に到達。

一九三五年、カブルウ(二四、〇〇二呎)山巔はシイ・アル・クウクにより獲得された。ジイ・スコバアスは最後の岩場まで同行、これはヒマラヤ登山として、おくれた季節(十一月十八日)に行はれた點興味がある。

一九三六年のフランス探檢隊のカラコオラム入りは同年のエヴエレスト同樣惡天候に阻止され、業績の見るべきもの少ない。

ナンダ・デヴイ成功後のものとしては一九三六年のシニオルチユ登頂が最も目ざましい。この峯は嘗てカンチエンジユンガ山彙中「近づき難きものの集團」と言はれてゐたものである。登山隊はボオル・バウアを隊長とする獨逸の小規模登山隊である。尙同山はヒマラヤ山中最も美しい峯として知られてゐる。

シツキムに於ては其他マルコ・パリス隊のシイムヴユの不成功。シイ・アル・クウクとエフ・エス・チヤブマンのフリユウテツド・ピイクを含む二萬呎以上の數々の峯への登頂が記錄すべきものである。

ナンガ・パルバアトに對しては更に一九三八年ボオル・バアウアを隊長とした登山隊が向つた。七月下旬二三、〇〇〇呎に迄到達したが惡天候により退却。一九三四年遭難のウキリ・メルクル及ガアイ・ラアイ(ボオタア)の遺體は右登攀中に發見された。

一九三七年夏中登頂された數々の高峯中チヨモラリ(二三、九九七呎)はスペンサア・チヤブマンがボオタア一名を伴つて成功。マナ・ピイク(二三、八六〇呎)はビイ・アル・オリヴア及スマイスにより、但登頂はスマイス單獨にて、成功。他に二一、四〇〇呎、二一、五〇〇呎及二二、四八一呎の三峯も兩名により登頂。更にニルカンタ及ドウナギリをも試みたが之等は惡天候のため成功せず、兩名はバンケ・グラシア上の素晴しい高地をも探險した。これは一九三七年五月印度測量局のアル・エイ・ガアデイナアにより發見されたものである。

スマイスは西藏ボオタア三名を伴つてザスカル山脈中七つの高峯に登つた、その中には登頂最も困難とされてゐたニルギリ・パルバアト(二一、二六四呎)も含まれてゐる。

一九三八年シイ・エス・ヒユウストンはカラコオラムに一隊を率ひた。この企畫中K2二八、二五〇呎へ果敢な登攀を行つた。北西山稜に基地を得ることは失敗したが、七人のボオタアと共に二六、〇〇〇呎にまで登り得た。

カラコオラムへの他の探檢はジエイ・ビイ・ハリスン、オ・エム・ロバアツ、アル・エイ・ホジユキン、グレイアム・ブラウン、ジエイ・ウオルカア、エイ・ジエイ・テイスデイル及エリザベス・テイスデイルにより行はれた。主要目的はマシエルブルム二五、六六〇呎であつた。二四、六〇〇呎に第七キヤンプを建設後ハリスンとホジユキンとは約二五、〇〇〇呎に達したが惡天候に阻止され第六キヤンプに引上途中吹雪に惱まされて雪中に一夜を過すことになり兩名共激しい凍傷を受けたがシエルバボオタアの獻身的努力により之以上の災難から免れた。

ガンジス川の原泉たるバドリナスーケダルナス・レインジへの探險は一九三八年秋アル・シユワルツグゥウバアの率ひる一隊により行はれ同地域の數々の峯にも登つた。

▲印度測量局 (The Survey of India)

目下ゴルドン・オスマストンの指揮の下に活躍、ガアルワル及クマオンの再測量を行つており既に幾多のものは完成。シプトン及ティルマンによつてシャクスガム探檢中廣地域に亘つて地圖の製作も行はれた。

▲ヒマラヤン・クラブ

一九二八年二月十七日ニユウデリに於て創立、その目的とする處はヒマラヤ地方への旅行、探檢の奬勵と援助であり更に科學、美術文藝及スポートを通じてヒマラヤの知識を紹介するにある。

右クラブの創設には故ゼオフレイ・コオベツト、ケネス・メイス

ンによつてなされ會員現在數三五〇名内婦人三名である。現在會長はサア・ハリイ・ヘイグ、ジェイ・エス・エチ・シャトックがオノラリイ・セクレタリイである。

譯者附記

右登山史は簡單すぎるからもう少し委しく知らうとする人のために各登山記事が「ヒマラヤン・ジアーナル」に掲載された號數並に頁數及び各報告書等を左に記した。但、最近十數年間のもの並に右登山史に記されたもののみに限つた。同一登山に關し各種發表ありしものはその代表的なものだけにした。

△カンチエンジュンガ——

●一九二九年フアマアの死——ヒマラヤン・ジアーナル第二卷(一九三〇年刊)一二〇頁……以下二の一二〇と略記。

●一九二九年獨逸登山隊(バウア)——二の一三。

Im Kampf um den Himalaja (Bauer) (1931刊)

●一九三〇年國際登山隊(ディレンフェルト)——三の七七

Himalaya: Unsere Expedition 1930 (Dyrenfurth) (1931)

The Kangchenjunga Adventure (Smythe) (1930)

●一九三一年獨逸登山隊(バウア)——四の一一六

Um den Kantsch (Bauer) (1933)

Himalayan Campaign(S.Austin 譯) (1937)

(右一九二九年及三一年バウア著書の集錄)

△ジョンソン・ビイク登頂——三の八九

△カメツト一九三一年——四の二七

Kamet Conquered (Smythe) (1932)

△エヴヤレスト——

●一九二一年

Mount Everest: The Reconnaissance 1921 (Howard-Bury) (1922)

●一九二二年

The Assault on Mount Everest: 1922 (Bruce) (1923)

●一九二四年

The Fight for Everest: 1924 (Norton) (1925)

●一九三三年——六の三一

Everest; 1933 (Ruttledge) (1934)

●一九三五年——八の一

●一九三六年——九の一

Everest; The Unfinished Adventure (Ruttledge) (1937)

●一九三八年——一一の一

●モオリス・ウイルソンの死の批評——七の一六九

●エヴエレスト飛行——六の五四

First Over Everest; 1933 Fellowes 其他) (1933)

△ギルギツト飛行——五の一一四

△ナンガ・パルバアト

●一九三二年(メルクル)——五の六六

●一九三四年獨逸登山隊(メルクル)——七の二七

Deutsche Am Nanga Parbat 1934 (Bechtold) (1935)

●一九三七年獨逸登山隊(ウイン)——一〇の一四五

Auf Kundfahrf im Himalaja (Bauer) (1937)

(一九三七年ナンガパルバアト及一九三六年シニオルチユ)

●一九三八年(バウア)——一一の八九

△一九三四年カラコオラム——クキンメアリ(デイレンフェルト)

Dämon Himalaya (Dyrenfurth) (1935)

△一九三四年ナンダ・デヴイ山域(シプトン、テイルマン)——七の一

△一九三六年ナンダ・デヴイ(テルマン)——九の二一

The Ascent of Nanda Devi (Tilman) (1937)

△パンジタリに於けるStoehr及バアンの事故——五の一〇五

同追悼記——五の一一〇

△ヒマラヤン・クラブ會員のシツキムへの數々の探檢——九の一六七「シツキム・ヒマラヤに於ける探檢並に登山」

△一九三五年ビイク36(ハント、ウオーラア其他)——八の一四及九の一二七

△一九三五年カブルウ(クウク)——八の一〇七

△一九三六カラコラム(佛蘭西遠征隊)——九の一〇〇

L'Expédition Française a L'Himalaya (1930)

△一九三六年シニオルチユ(バウア)——九の五八

△一九三六年シツキム(マルコ・パリス)——九の一四八

△一九三六年フリユウテツド・ビイク(クウク)——九の八八

△一九三七年チヨモラリ(チヤプマン)——一〇の一二六

△一九三七年マナ・ビイク(スマイス)——一〇の一七八。

ニルギリ・パルバアト(スマイス)——一〇の一八〇。

△一九三七年ガルワル(ガアディナア)一〇の一七七。

△一九三八年K2(ヒユウストン)——一一年の一一四

Five Miles High(Bates)(1939)

△一九三八年マシエルブルム(リスン)——一一の四二

△一九三八年バドリナス・ケダルナス(シユワルツグルウバア)——一一の一四〇

△測量部

●ガルワル・クマオン——九の七四及一〇の一七七

●シヤクスガム——一〇の二二

Blank on the Map(Shipton) (1938)

●ガンゴトリ——一一の一二八

△ヒマラヤン・クラブ

創立——一の一

同クラブの報告誌ヒマラヤン・ジアーナルは一九二九年四月第一卷第一號を刊行以來毎年一回四月頃刊行、編輯ケニス・メイスン賣價五ルピイ(八シリング)一一年より六ルピイ八アンナ(一〇シリング)同誌は會員外にも發賣したものである。

ヒマラヤン・ジアーナルはヒマラヤ事情を知るに最も必要な資料である。ヒマラヤに於ける探檢、登山等は一通りは同誌に掲載される。右登山史の各登山の説明を同誌に求めたのも、それが一番便利であつたからである

十二卷(一九四〇年)は日英間風雲急となつて來たためか譯者の所へは發したといふものが遂に到着しない。但、當會の分は到着してゐる。

冬の蓼科池の平

茨木猪之吉

暮にはまだ間のある或る日だつた。綿入のチャンチャン衣にモンペイ姿の交野君が訪ねての話に本朝山から歸へつたとの事で、どうやら炭燒きの助手らしい口振りだつた。是非一度御案内しましやうと云つて山の話に耽ける、約束成り十二月十二日夜行新宿で待ち合す事に定めて歸へられた。

夜行は割合樂な汽車で茅野は通過上諏訪に着いて、急ぐ氏の知人宅を起し炬燵に這入り入浴後朝飯の御馳走になつて上り列車にかけつける。茅野驛下車バスに乘り込み北山村湯川に達した柏原の部落の農家を點々と訪ひ、要用をすまし、ゆるりと大門峠にかゝる。八ツ岳は峯の線を堅く冬空にクツキリと浮ばせ遙に甲斐駒仙丈岳を見凍てつく峠道は傷々しい霧ケ峯方面は雪全くなく冬枯れた茅戸に雜木林のみ、突然木曾駒の眞白い雪が輝くあたりで一ぷく休み、のんびりと再び腰を上げる。

峠に出た。長野縣立青年道場の建物が行く手に眼につく、工事休止の堤防雜林の間を流れる水は最も寒々しい。蓼科山は調子よく雪を頂いて、午後の光りをうけてゐる。峯の小屋に着く、ストウブに寄り添ひ暖をとる、お内儀さんが

今日御出を待ちわびて大方皆さんが首を長くし、或はもうやつてゐる事でしやうと、私達はすぐその足で向丘にある堂々たる農家作りの建物に向つた。之れは交野君の關係してゐる練成道場の殆んど落成した、今日はお祝ひだつた。待つて居たよう、もう今に來るかとそれでも遲いが、待ちくたびれて始めてしまつた所さあ……まあ〳〵と奥の炬燵を圍んで兎肉の御馳走酒は、たんまり用意ありで其の夜は大ふる舞大輝踏會だつた。いつか夜道を下つて丸万小屋の奥の間の炬燵の中に倒れてしまつた。

翌早朝、冬の枯野池の平一面霜を帶び針金の樣な落葉松が鋭い三四日は私の作畫生活が始まつた。お正月も久是非との言葉を後に下山してしまつた、油八號描きかけを携へて、柏原村の寺前から峠の登り口の片側農家を取り入れた寒村風景を板寸に描く、時間がないので殘念未成でリックのヒモを締めた。例により點々とお馴染の農家を訪ね、最終のバスで茅野驛へのして夜行列車を宿の入口で待つた。

愈々十二月も暮にせまつた。交野君は出張命令を兼ね一足先へと通知を私によせられ信越線を走る、私は暮の混雜と鐵道省のポスターを信じた譯ではないが、子供達を連れた年末旅行は不可能だつた。決戰下の緊張したお正月の元旦をすまし二日早朝切符を求め急ぐ仕度を整へ新宿へかけつけた。どうやら腰を下し地方の人々、春らしい笑顏は喜ばしい、幸ひ次女駒子を連れて居たので枝突峠の方へ西陽が落ちた頃茅野驛に着いて例の宿屋に二階の見晴しよき室の炬燵に足を入れた。久々で落ち付いた晩飯をとつて横になる、翌早朝のバスにて湯川區へ、村の人々へお正月の挨拶をかはし、柏原の家に休んでボツ〳〵峠路を登る。十二月の時とちがつて雪も頂上近き地には相當に多かつた。峯の小屋に着いたら交野君一行が迎へてくれた。例のストウブに添つて靴の紐をゆるめる、お正月の事で小屋主人の身寄り若者達やで賑やかだつた。私達は早速新世帶の出來上つた交野君の小屋へ案内される。丘の中腹、眺望のよき岩頭の一角、遙に菅平方面の雪霧ケ峯車山は手に取る樣に白樺疎林を背に清水がツララを下げて靜かな音をたてゝ流れてゐる。忠臣藏五段目の定九郎がぬつと腕でも出てくる樣な茅屋、炭燒小屋だが中は暖かで燃料は豊富にあり、爐を圍んでお正月のお餅やいろ〳〵御馳走は何んとも樂しいものだつた。其の夜は寢具を重ね、ミノ蟲いやもつと高級な絹布は外形のそれとは大變相違して而も夜中、焚火は少々頭の方が暖い位だつた。駒子は喜んだ翌日から、それ〴〵仕事があつた。私は例の描きかけを仕上げに堤防のほとりに行く、雪中の風光別段

で蓼科山は素晴しい雪が昨夜來たとみえる。どうやら仕事も纏まり小屋に歸へつたら一足後になつた川喜田君も見え岳人相集まり、談多くは山住居の生活に入る、薄暗頃丸万小屋に引き揚げ炬燵で暮の忙がしかつた話やら山住居の快適さを賞しつゝいつか床に就く、吹雪の日もあつた。別屋に籠つて通信やら或は室内風景やらを板寸に染め、夕方晴れたので屋外に出る、池の平一帶はかなり白い峠の方へ歩く、寒さは身にしむ。

交野君一行は引き揚げ下山、歸京の駒子を依頼して私と川喜田君は殘る、少々纏める作があるので、翌日は雪路へ山神に禮をして降る、平凡な天氣にかゝはらず柏原寺前にて描きかけを仕上げる。同村の兩角氏宅へ立寄り、古いアララギ歌人で默々として語る、實に純朴さは有難い珍らしき肉筆繪ハガキは伊藤左千夫先生と結城素明先生の合作は珍品だつた。

其の家を辭してバスの時間の都合悪しく「堀」部落まで歩き折から引きかへしのバスで茅野へ續いてバス上諏訪行に乘り、間もなく温泉町に入り無理に宿屋へ泊て貰らい燃料不足か夜中入浴の態、早朝の汽車を待つて歸京、川喜田君と甲府で別れた。

（十九年一月十五日）

萬年雪と氷河のほとり

オゴ・ルーヤシ

追憶

私達は山頂にあつて、彼の積んだトウール・ノアールのケルンに倚つてゐた。

若々しく力强い二人であつた。

一時間が過ぎ去つた、そうしてまた一時間が。

ものみなが靜かだつた。

緣がゝつた氷のクーロアールも、滑らかな斷崖の灰色の岩も、大きく口をあいた冷めたさうな深い淵も、蒼白く擴がつてゐる氷河も、みな靜かだつた。

雪と峯との交錯した擴がりも、み渡すかぎり靜かだつた。

み渡す限り、大空のはてまでも…ものみなが靜かだつた……

靜けさと氣高さ……

私達の若い心をつゝんでくれる彼を身近に感じ、私達も彼とおなじ感激にひたり……耳を澄ました。

私達も彼とおなじ喜悅に、彼を身近に感じ……ぢつと眺め入つた。

そうして彼の邪魔をしないやうにと、私達は默してゐた。

褪せた光に綾どられ、夕日の消える彼方の空から落ちてくる、黃昏の波が、山のいたゞきを薔薇色に染めて、私達のところまでうち寄せてきた。

二時間目も過ぎ去らうとして、私達は身を起こした。

夜の忍びよる東の方に、おりていつた。

茜色の明るい中に嵌め込んだやうな、黑いケルンが目に映つた。

山岳讃仰のために建立された素朴な祭壇と人はいふであらう、

トウール・ノアールの石片もて、彼の建立した祭壇。

彼みづからの祭壇。

言ひ難き熱情が、どんなに私達を搖すぶつたことか？　私達は彼の名を呼び叫んだ。

永遠に佗しげに凍りついたその儘の姿で、

彼がそれを識り、

彼がそれをほめ讃へ、

彼がそれを愛した、

鼠色の岩も、灰褐色の岩も、赭い岩も、身を慄はせて、彼の名を喚んでゐるのだつた。

ジャベル！

夜の劒ひのぼつてくる方へ、言葉もなく私達はおりていつた。

原著について　藤島敏男

原著はシャール・ゴオの數多い著作中の處女作品集である。

「アルプスの印象」と傍題され、著者の父アルベールのペン畫十三葉に飾られ、ギド・レイが先輩として激勵と同情とを含んだ序文を載せ、孤高の山岳文人エミール・ジャベルに獻呈された、この書物の初版が世に送られたのは、いつ頃か今之を詳かにしないが、右の序文が一九一二年五月四日チューリンにてとあるのから推して、前歐洲大戰の直前と思はれる。私の所藏は三版と五版とであるが。何れも年號の記載を缺いてゐる。

著者に就いて私の知るところはレマン湖畔の住人で、アルプスに相當廣い足跡をもち、山岳隨筆や小說や登山史などを澤山書いてゐる六十歲前後のスイス人だといふ程度である。登山家としては、シヤモニーのエギーユ・ド・グレボンに、ガイドレスでヴアリアントを拓いてゐるなど相當のものであるが、山岳文家としても、才筆といはうか、讀者を惹付ける力を持つてゐる。

この原著と著者とを我國の登山界に初めて紹介したのは、故大島亮吉氏であらう。「山とスキー」（三八—九號一九二四年）所載の「山への想片」の中で、この書から「山に寄する讃歌」を引き、また靜觀的な態度の登山家の一人として、ゴオその人を擧げてある。

こゝに譯したのは、著者がこの書を獻じたほど敬愛するエミールジャベルへの「追憶」で、卷頭の一章である。文中「彼」とあるのはジャベルその人を指したのであり、トウール・ノアール（三八三六米）はモン・ブラン山群の一峯ジャベルが初登攀した山であることを念のために書いておかう。散文詩のやうな形式で書かれた原文の趣が出てゐれば、と思ふ。私は折にふれてこの本から、短いものを譯してゆきたいと考へてゐる。

誤植訂正

一二七號吉永氏「横倉山」中左の誤植を訂正致します。

	誤	正
一頁二段一七行	懦	儒
〃三段二行	不構美	構不美
〃三段一〇行	大古霧	大古雲
〃四段	還家。	還家。」

切抜帳

山岳、地誌、民俗等に關する新刊書目拔萃

（新刊弘報に據る）

弘報第二十號—第廿二號掲載分（刊行豫定日　二月一日—三月十日）

●古代絹街道
ヘルマン著　安武納譯　霞ヶ關書房
—所謂シルクロードの疑義を最近の歐米諸國の探檢成果に照しつゝローマ文書と支那古文書とを拔渉して純科學的に文物地理を考察

●セレベス民俗誌
グリユウバウエル著　清野謙次譯　小山書店
—石ドイツ民族學者の南東及中央セレベス調査

●青葉の旅・落葉の旅
田部重治著六合書院
—日本の自然に對する思慕と敬愛の情を述べ不識不知の間に大いなる祖國愛を覺えしめんとするもの

●植物分類地理
植物分類地理學會編　星野書店

●世界最惡の旅
チエリー・ガラード著　加納一郎譯　朋文堂
—スコット南極探隊檢の詳細記述、著者は動物學者として參加、歸還後十年にして嚴密なる自己批判を加へて執筆せり

●改訂大和志料（上）
奈良縣教育會編　天理時報社
—大和の町村、山川、神社、佛閣、城壘等についてその史的根據を明かにすると共に詳細なる地誌的説明を加へ歴史及地誌辭典たらしめんとす。舊版に比し註釋の附加、挿繪の增加等を行へり

●東印度
田中蘇著　目黒書店
—地理、民族、產業等を著者自作の寫眞により報道解説せるもの。昭和十三年著者踏査に基く

●神々の座（アフガニスタン、インド、ビルマ、チベット紀行）
テイヒー著村上啓夫譯　鎌倉書房
—オーストリーの地質學者テイヒーの西南アジア紀行印象記。神々の座はカイラスを指す

●回想の山々
桑原武夫著　七丈書院
—著者の登山紀行及現代フランス山岳文學中の傑作と雪崩研究の重要文獻の翻譯

●カンボチヤ紀行
三宅一郎譯　青磁社
—一八七三年第二回カンボチア探檢隊長ドラボルトの有名なる「カンボチア紀行」の全譯

●ハウスホーフアの「太平洋地政學」解説
青谷莊一郎著　六興出版部

●草原の研究
中野治房著　岩波書店
—御花畠より河岸草原まで本邦草原を純生態學上より取扱ふ

●日本羊齒類圖鑑
伊藤洋著　厚生閣
—國產羊齒類五一二種の圖説

●南洋の地質
大村一藏編　古今書院
—ウムグロウヴ「東印度地史」リユウボルト及フアン・デル・フレルク「東印度の第三系」スクリヴナア「マライ半島及東印度諸島の地質學的研究の現狀」を翻譯編纂、編者研究を加筆

●土
關豐太郎著　誠文堂新光社
—最近土壤學の大要を記述

●東北の方言
小林好日著　三省堂

●方言と方言學
東條操著　春陽堂書店

●旅と日本文學
井本農一編　成武堂
—古事記より現代作家に至る旅の文學を選定、解説せるもの

●農村復興
安騎東野著　甲鳥書林
—東大醫學部學生達の農村厚生運動の體驗記

●高砂族バイワヌの民藝
小林保祥著　三國書房
—著者の企圖する「高砂族習俗」の初編

●赤城の四季
猪谷六合雄著　山と溪谷社
—著書の赤城山に於ける寫眞集に志賀、里見、長與、關口諸氏の文を揭ぐ

●戰技スキー訓練要項
大日本體育會編

●東京都附近の健步路
小野幸著　朋文堂
—東京を中心とする日歸り（前夜發共）健步路百コースを個人隣組、產報隊、學徒等のために地圖入解説せるもの

●滿洲考古學
八木非三郎著　荻原星文館
—著書李王家博物館長

●日本人種論變遷史
清野謙次著　小山書店

●滿洲の史蹟
村田治郎著　座右寶刊行會
—上古より清代に至る遺蹟遺物の概觀、重要史蹟の研究、圖版と挿圖二八〇版

●朝鮮古代文化の研究
齋藤忠著　地人書館

●古代印度の研究
佐保田鶴治著　立命館出版部

●讃岐民話集
三木春露著　旅行文化社

●太平洋島嶼誌
莊司壺季著　三省堂

●シベリアの自然と文化
尾瀨敬止著　山雅房
—特に文化的視角より記し且我國との關係を述ぶ

●昭和十九年天文年表
田上天文臺編　恒星社

●大東亞鳥類圖譜—第二輯—
内田清之助編　有光社

●實驗溫泉治療學
松尾武幸著　金原商店

●心の行方を追ふて
田部重治著　朱雀書林
—長編「隨想」を中心とし隨筆、論文、詩等を集む（同名の書第一書房より既刊）

●武藏野の記錄
織田一磨著　洗林堂書店
—繪と文との寫生を以つて變遷甚だしい武藏野の相貌を記錄

●詩集わが山々の歌
前田鐵之助著　朋文堂

●丹澤山塊（日本山岳寫眞書）
●上越國境（〃）
塚本閑治著　山と溪谷社

●地球の記錄
米山芳藏著　目黒書店
上級生向に解説せるもの

會員通信

黑菱合宿

跡部昌三

正月は黑菱小屋に一日から五日間ゐました。最初は連中で猿倉合宿を計畫してゐたのですが、猿倉小屋が昨秋取拂はれてない——（今夏までに夏冬利用の小屋を建てるとか）——事が判つて、何處か小屋番のゐない、そして環境のよい、適當な小屋と場所とを物色しましたが、思はしい處もなく、そのうちに餘裕がなくなつて、やむを得ずこまない栂池小屋でやる事にきめました。處が此處の小屋番が暮迫つてから徵用となつて正月は小屋閉鎖といふ通知を受けたのです。これは幸と思つたものの今度はそれに對應する準備が出來てゐず、參加確定の連中も種々の事情から物凄く減じて、遂に黑菱小屋に行く事にきめたやうな事です。

こみはしないかと怖れてゐた黑菱小屋は思ひの外閑散で、私達四人を入れて十人から十三—四人の宿泊者、五日間居たのは私達だけといふ有樣で、全くあきれました。だが決戰下にある日本であつてみれば、之は當然な現象であつて寧ろ歡ぶべきではないかとも思つた事です。こう考へると種々と反省せねばならぬものゝある事をも自づと知らされるのでした。

合宿として出發した正月計畫も、御難つゞきで、遂に黑菱小屋に及んで他愛もないものになつてしまひ、八方の天候も思はしくなくて、中繼小屋までが最高でしたが、上へ午前登れば午後は細野のスキー場へ滑降するといふことを毎日日課のやうに繰り返へしてゐました。戰ふ日本にあつて、斯うした惠れた生活をもち得た事は、最先に感謝しなくては、正直罰があたると思つた事です。

一刻一日もゆるがせに出來ない現在、能なしすゞめのやうに、登つたり滑つたりしてゐて實に申譯のない事です。しかし、相當の成果を擧げるためには、それ相應の確實なる計畫をはつきりもつてゐて、刻々の狀勢に應じてきばきと手を打つて往く態勢になくては、今日のやうな狀態下に在つては、その成果を期することは全く至難であつて、思ひつきで飛び出したり、又私達のやうに向脛をかつぱらわれたやうな場合は、勢ひ低調になり勝ちとなり、それを建て直すことは事實容易なものではありません。尤もこれらの道理は以前とても同じですが、昨今では曾つてとは比較にならぬ程總ての條件が嚴しく、融通性が甚だ乏しくなつてゐます。

それにこんな氣持もあります。日々が緊迫せる勤務であり、生活しつゞけてゐるものは、たまの休暇に得た山行は、その反動とでも謂ふのか、肩のこらない、安易なもの、例へば疲勞快復劑か、一服の清涼劑を求めるやうに、これが反比例的に強く欲する傾向が多分あります。そしてこの種のものにも、尙逞しくあらしめんが爲に鍊成をその上に架し、更に鞭を加える事は、望ましい乍ら果して當を得てゐるか、それがより効果的であるかといふことが、一層頑張らねばならぬと識りつゝも、併せて考へられて來ます。

また一方、嚴格な熾烈な指導方針は、この種のものをして勢ひ内攻、つまり萎縮せしめたり、綱の目をくゞるやうな甚だ不健康な事を招ぜしめやしないかとも思ひます。

決戰下のスキーや登山は斯くあらねばならぬと說くのを聞くに、時にはまるで登山やスキーをやるものは、何かそれをなかば本業としてやつてゐるかの樣な錯覺を生じます。これは私のひが目かも知りませんが、一般的にみて、登山やスキーが私達の日常生活のどれ丈けを占むるものでせう。

しかし、現下の狀勢はあらゆる能力を、擧げて戰力增强に捧げ、何がなんでも勝ち拔かねばならぬとき、こんな微溫的な、悠長な考へ方や、まわりくどい事は許される筈がないといふことが絶えずつきまとつてゐます。

この聲を大きくすれば結局「やめる」ことが殘されるだけですし、事態の變化によつては行きたくも行く氣がせぬでせうが。今日では、不健全なものは別ですが、悉ゆるものゝ存在をそれぞれに於て育成强化し、綜合して、戰力增强にふりむける事が眞實ではないだらうかといふ事もまた思ひ浮んで來ます。

不平不滿でなく、まだ言はねばならぬ事、主張したい事、考へねばならぬ事も多々ありますが、いづれにしても、實際問題としてこのやうな事は、その適正點をよく摑むことが仲々困難であり、又みる眼、立場によつて視野も種々異るなど、洵に難しい微妙な問題です。わけて指導的位置にある人は尙更と思ひますが、この苦しみを貫いてこそ、明日の正しい登山やスキーが生れ、且つ把握出來るのぢやないかと思ひます。

黑菱小屋行につれて、ふつと思ひついたこと、考へてみたところを、少し書いてみました。何もその蔭にかくれて、自身の行動に勝手な理窟や勿體をつけていゝ氣にならうとは毛頭思つてはゐませんし、享樂的な登山やスキーに尠しの未練をもつものではありません。より健やかに、建設的に自身のもつものが動員される事を冀ひ、勝ち拔くために出來得る限りこの力を捧げたいと念じてゐます。だが私もまだ心の清算がはつきりとしきれない一人かも知れません。諸氏の叱正を仰ぐことが出來れば眞に結構と存じます。

（一九・一・一五）

出發に際し

長屋敏郎

謹啓時下春寒未だ嚴しく候折柄高堂益々御清祥の事と存候

扨小生儀曩に桐生高等工業學校並に大東亞鍊成院在任中は公私とも種々御高配御指導を賜はり深謝罷在候

然るところ昨年十二月二十九日附を以つて陸軍司政官に任ぜられ候にいつては今後とも何分の御指導御高庇賜はり度願上候

近く南方現地に勇躍赴くことゝ相成候については皇恩の萬分の一に報ひ奉らんと新たなる決意に一際

燃え立ち居候
尚今後は兎角御無沙汰いたすことゝ相成るべく此段御諒承願上候
先は右御挨拶迄如斯御座候　敬具
昭和十九年二月

航空隊より

海軍豫備學生
中村一

その後御無沙汰申し上げて居ります。貴會が色々の資材難等も物ともせず、日本山岳界の爲、益々活潑な動きを示されて居られるのは、何時もながら敬服して居ります。

この度私は○○に轉勤致しましたので此の段御通知申しあげます。私が海軍に入り最も强く感じた事は山を知るといふことが如何に價値のあるものであるかといふことです。特に精神的に、國土を愛する意味にも、又他の色々な意味にても重大な意義のあることを知りました。（下略　十九年二月

圖書基金受領

一口金五圓也　細川景正氏
二口金拾圓也　飯田末喜氏
一口金五圓也　久保田春雄氏

會告

定款ノ一部ヲ左ノ通リ改訂ス

第六條、第一、二項
一、通常會員ハ本會ノ趣旨ニ贊シ會費年額拾圓ヲ納ムル者トス
二、終身會員ハ前號ニ準ジ一時金貳百圓以上ヲ納メタル者又ハ入會後滿十年以上ヲ經過シタル通常會員ニシテ一時金百五拾圓以上ヲ納メタル者トス

右ハ昭和十八年度通常總會決議ニヨリ昭和十八年度ヨリ實施ス
（昭和十八年十月認可）

會費納付ニ關スル規定

第一條　通常會費（年額拾圓）ハ毎年四月末日マデニ納付スベキモノトス
但シ半額ヅツ年二回ニ分納スルコトヲ妨ゲズ
右ノ場合ハ前期ハ四月末日マデ後期ハ十月末日マデニ納付スベキモノトス

定款一部拔萃

第二十五條　本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

會員消息

石原憲治氏（住宅營團調査課長）日本農民家屋の研究論文により今回工學博士の學位を受く。
木原均氏　小麥の研究によりさきに學士院賞を授與されたが、今回又野間賞を得た。
城山正三氏　白頭山特輯を編纂刊行した。
桑原武夫氏　著作「回想の山々」刊行。
林唯一氏　繪と文による從軍記爆彈下に描くを著述刊行。
辻村太郎氏（東大助教授）今回東京帝大教授に任ぜらる。
權藤太郎氏（九州配電社員）軍委託電氣事業經營の爲ジャワに出向。
橋浦彦三氏（不二越鋼材重役）新設の呉羽航空機製作所取締役に就任。
春日部馨氏（陸軍通譯官）キスカ島にて戰傷、目下旭川陸軍病院にて治療中。尙同氏は春日薫の筆名にて戰記等執筆中の由。
西岡一雄氏　週間毎日誌に「山岳兵出でよ」の文章發表。

山の繪の會展
五月十二日—十六日
於　銀座　日本樂器店

通常總會開催御通知

日時　五月十四日（日）午後二時
場所　藏前工業會館　新橋驛前）

次第

一、昭和十八年度收支決算報告及昭和十九年度豫算附議ノ件
一、本會ノ目的ニ關スル定款一部改訂ノ件
一、任期滿了ノ役員留任ニ關スル件及補缺役員選任ノ件

右ニ付四月ノ役員總會ニ於テ時局柄任期滿了ノ役員ノ改選ヲ行ハズ全部留任スル事、補缺監事ニ黑田孝雄氏、補缺幹事ニ垣内政彦氏、關根吉郎氏ヲ推薦スル事ニ決定致シ候ニ付テハ何卒御贊同賜度願上候

一、其他

昭和十九年四月

社團法人　日本山岳會

本會ノ目的ニ關スル定款一部改訂案（役員總會決定當局ト交渉中）

第三條　本會ハ登山並ニ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條　本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ要フ
一、機關誌「山岳」其他圖書ノ刊行
二、研究會、講演會、講習會等ノ開催
三、其ノ他本會ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業

追而右ニ關シ當日御缺席ノ向ニテ御意見有之候ハバ前日迄ニ御申出相成度、御意見ナク缺席ノ向ハ乍滕手委任御出席トシテ御取扱申上候間御諒承被下度願上候

編輯後記

小野さんのお勸めが目下比較的遠方の僞迅速な連絡が困難なので元の勤先へお歸りになる迄富分まだ田邊さんの勞を煩はさねばならぬやうです。この號の原稿も殆んど全部田邊さんのお集めになったものですが。本號は特に急いで刊行せねばならぬ事情がありますので私は臨時に組立を致しました。出版界の惱理も相當に進んだやうでありますが、本會報などは別に影響も受けないものと思はれます。どうぞ御安心下さい。

皆さんどなたもお忙しい事は分つて居りますが、矢張り原稿がなくては會報は出せません。何卒御執筆下さるやう全會員各位へお願ひ致します。（塚本繁松）

昭和十九年四月二十三日印刷納本
昭和十九年四月二十五日發行
頒價 ㊎ 二十錢
日本山岳會內
編輯者 田邊主計
發行者 塚本繁松
東京都芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所 社團法人 日本山岳會
電話（芝）一六四九
振替東京四八二九
會員番號 二二二〇三三
東京都神田區佐久間町三ノ三七
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話下谷(83)六七九五
會員番號 東東三三一七
東京都神田區淡路町
配給元 日本出版配給株式會社

山と溪谷

第84號出來。創刊以來十五年の歴史を有する本誌は決戰下唯一の山岳雜誌として倍々重きを加へ、更に今回用紙增配の特典に浴した僞、從來入手難の讀者はこの際書店豫約、又は直接本社御注文願へれば御入手出來ます。主要目次—スキー總進軍、山の繪、極地探檢家列傳、戰技詩篇、九州の山、九州のスキー、四阿山志賀高原スキー夜間突破、岳人辭典、アラスカの山、東北へのスキー行軍、近畿の山々、乘鞍紀行、八幡平の冬、甲府中學の强行軍記、附錄—志賀高原近傍スキー用地圖。（1部 70 送12年 ㊎4.20）

山岳詩集

川崎隆章編、祖國山岳美の高貴を傳へ、或は戰ふ銃後の山村を描く散文入り詩集本文二色刷原色版口繪入り（賣價3.5）送 15）七月刊行

槍ケ岳へ

塚本閤治著、日本山岳寫眞書第五篇、原色版口繪入り、大好評再版四月中旬發賣（賣價 2.50）送.12）

丹澤山塊

塚本閤治著、日本山岳寫眞書第六篇、原色版口繪入り、七月中旬發賣（賣價 2.92 送 .12）

山岳辭典

木暮里太郎監修、川崎隆章編 本書は山岳に關する一切の事項を細大洩らさず五十音順に配列し、卷末附錄と相俟つて岳人の師友としての山岳辭典の完璧を期した。執筆者は各方面の權威を網羅す。（賣價未定）近刊

赤城の四季

猪谷六合雄著、A5判アート刷に上州の名山赤城の四季の名寫眞を展開した待望の豪華版にて、志賀直哉、里見淳、長與善郎、關口泰四權威の隨想を盛る。七月中旬刊行。（賣價 6.00）送 .40）

上越國境

塚本閤治著、日本山岳寫眞書第七篇、原色版口繪入り、中村謙氏解說と寫眞に依る上越國境全域の詳解書。八月下旬發賣（賣價 2.92 送 .12）

山岳渴仰

中村清太郎著、原色版口繪二葉、序小島烏水、木暮理太郎、跋田部重治、裝幀著者、山岳の神聖を繪と文に由り描く中村氏の處女作愈々成る。七月下旬刊行。（賣價4.00送.30）

☆本社出版物は書店申込み又は直接本社へ★

東京都芝區田村町6—4 **山と溪谷社** 電話（芝）543番 振替東京 60249番

キスリング型（E式）

ルックザック

御手元にある布地御持參になれば御調製申上げます

山とスキー具專門

東都最古の專門店

東京都神田區神保町三ノ一（專修大學電停前）

片桐テント登山具店

電話 九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番

店主 片桐盛之助